

1年半くらい前にプロボクシングの亀田興毅が初めて世界タイトルマッチを行った。第1ラウンドにノックダウンをくらったが最後まで戦い判定に持ち込まれた。誰の目から見ても亀田が負けているのは明らかだったが、なんと判定は亀田の勝利となり世界チャンピオンになった。それを中継していたテレビ局には数百の抗議電話が来たそうである。その夜に家でテレビのスポーツニュースを見ていたら、あるスポーツ評論家が以下のような素晴らしい発言をしていた。「今日の亀田戦の判定は単にミスジャッジというだけでなく、ボクシング界にとって危機的状況です。ボクシングがスポーツとして生き残れるか、それともプロレスのように単なるショーになるかの瀬戸際です。」ということであった。ご存知のようにプロレスは初めから戦い方のストーリーができていてどちらが勝つか負けるか決まっていて、スポーツではなくて単なるショーである。そのため新聞やテレビのスポーツ欄には載らないわけである。亀田のタイトルマッチはまさに結果が最初から決められていたようなボクシングであったわけで、そのためにこのスポーツ評論家はボクシングの危機について嘆いたわけである。

このような批判が強かったために亀田サイドは半年後に同じカードで再度世界タイトル戦を行ったわけである。2回目は亀田があっさり勝ってしまった。今回はテレビ局には抗議の電話はかかってこなかったそうである。私は次の日の朝、テレビを見ていたら亀田のインタビューが映し出されていた。亀田は「対戦相手は弱くて簡単に打ち負かしたよ。俺は強いんだよ。」というような発言をしていた。私はこのテレビのシーンを見ていて愕然とした。ご存知のようにスポーツは戦う前は誰でもアグレッシブになり緊張感を自ら高め、対戦相手にプレッシャーをかけたりもする。しかし、闘い終わったらお互いの健闘をたたえ合うのがスポーツであり、スポーツマンシップである。柔道や剣道など日本古来の武道は「礼に始まり、礼に終わる」ともいわれる。ラグビーでは試合終了の時に「ノーサイド」という。試合が終われば必ず握手をしてお互いの健闘をたたえ合う。それなのに亀田は対戦相手をけなしばかりいたわけである。その時、私は気付いたのである。亀田は実はボクシングをしているのではない、スポーツをしているのではなくて、実は単に「ケンカ」をしているのである、ということに気付いたのである。亀田には「スポーツマンシップ」という意識は全くないのである。これはボクシングにとって危機的状態である。亀田がもし勝ち続けるならばボクシングはスポーツではなくなってしまうのである。私はその点を大変危惧している。また、最近の「大相撲」にもそのような傾向が見られて、私は大変危機感を持っている。

一方、「科学」の世界においても、どの研究テーマにおいてもライバルがいて熾烈な競争が日々、行われている。一刻の時間を争って夜も寝ずに徹夜実験を行っている研究グループも多い。ただし、どちらかが先に成果を達成したならば、ライバル相手は素直に相手の成果をたたえる度量が必要である。研究のオリジナリティーが誰にあるのかを素直に認めるべきである。そのような事ができない科学者は「データの捏造」や「研究テーマのパクリ」に走ったりする。このような事例が最近、多く見られる。これも「科学」にとって危機的な状況である。スポーツマンにとって「スポーツマンシップ」が大切なように、我々「科学者」はサイエンスに対する「倫理観」が当然、必要なのである。「科学的真理に対する尊厳」が必要なのである。亀田のボクシングを見るたびに、「科学者」の有るべき姿についても考えさせられる今日この頃である。